

東北大学大学院経済学研究科で（財務）会計研究者を目指す方へ*

（東北大学大学院経済学研究科・会計大学院 木村研究室）

1 会計研究者を目指しませんか？

「会計研究者」は、広い意味では「会計（およびそれに関わるテーマ）」について研究をする者を指しますが、ここでは、大学（院）等の研究機関で研究・教育する者に限定します¹。

会計の勉強を始めた方は、企業の経理職、公認会計士、税理士といった会計専門職を視野に入れる場合が多いかと思います。もちろん、会計専門職が魅力的な職業であることは言うまでもありません。しかし、大学での研究は、より幅広い・自由な視野で、自らが設定したテーマを設定できることが第一の魅力です。実務家の場合は、ある事項についてそれを受け入れることが求められます。一方、研究者は常に疑問を有することが求められます。

例えば、近年、各国の会計基準は国際財務報告基準（IFRS）への統合が進み、日本でも IFRS の任意適用が認められるようになりました。書店のビジネス書のコーナーでは、関連書籍が山積みされています。実務的な立場では、日本での適用について批判をしても無駄で有り、IFRS の理解、その下で作成された財務諸表の監査に対する理解を深めることが重要でしょう。他方、研究者の場合、そうした実務を観察・理解することは重要ですが、IFRS はどういった会計基準なのか、そして、それは優れた基準なのか、あるいは会計基準が統合されることはいいことなのか？といった点を考察していくことが重要となります。

もちろん、こうした研究に関わる特性は、「会計」のみならず他の分野にも当てはまります。

「会計」の面白さは、分析アプローチの多様さ、企業経営・社会とのつながり・・・にあると執筆者は、感じておりますが、それは皆さんそれぞれに見出していただくべきものなのでしょう。

第二の魅力としては教育にあります。大学の教育は高校までと異なり、「学習指導要領」のようなものではありません。学部なり大学院で一定の制約はありますが、教科書の選択（自分で執筆することも可能）、講義内容、評価について自らが決定することができます。例えば、筆者は、東北大学経済学部の財務会計の講義において、財務諸表分析に相当部分の時間を割いています。一般的な財務会計の講義では、財務諸表分析が取り上げられることは稀ですが、財務会計の仕組みを理解する上でも、学部生が会計に関心を持っていただく上でも有用であると考えています。こうした教育面での自由度は大学教員の醍醐味だと思います。

大学教育において、すぐに役立つべきことを教えるべきなのか、中長期的に役立つべきことを教えるのは難しい問題です。もちろん、大学のあるべき姿を考えれば、骨太な知識およびその獲得能力を有するよう教育することが求められますが、他方で、短期的な関心事に応えることも必要だと思います。そうした匙加減も含めた責任の重大性も魅力です。

* 本文書は、木村史彦（東北大学大学院経済学研究科・会計大学院 教授）の個人的な見解であり、東北大学および東北大学大学院経済学研究科の見解ではございません。また、日本人の学生を念頭に置いて執筆しております。留学生の方は、別資料をご参照ください。

¹ 大学以外の研究機関としては、企業会計基準委員会（ASBJ）などの会計基準設定機関、シンクタンクなどがあります。

2 会計研究者に求められる資質

会計研究者に求められる資質ですが、何よりも、会計に関する研究テーマを有することです。もちろん、学部生（または学部出身者）の段階で考える研究テーマがそのまま大学院で通用することは稀ですが、テーマを有さない方が研究者になることは困難です。

次いで、研究上の基本的な能力（リテラシー）を有することです。本大学院では、原則として日本語ベースでの教育が中心であることから、日本語論文を読むこと、書けることは必須です。さらに、研究において英語論文を読むことが必須ですので、一定の英語力は求められます（辞書を引きつつ、英語論文を読むことが最低限求められます）。また、近年では英語で論文を書くことも求められてきているので、英語でのライティング能力も求められます。ただし、ある程度の基礎的な語学力があれば、継続的な努力で語学力は高まります²。したがって、大学院入学までには、最低限英語の論文やテキストを読んで理解すること、そして、継続的に語学力向上に取り組まれる姿勢が重要です。

次いで、後述する点でもありますが、分析能力は極めて重要なものとなります。「研究」では何らかの「問い」に対する「解」が求められます。その「解」を見出すための手法が研究においては重要です。ここで、（財務）会計研究においては、主に次のような分析手法が用いられます³。第一は、法解釈的なアプローチであり、財務会計研究においてオーソドックスなアプローチとされてきました。財務会計は様々な規制の下で実施されるという側面が強く、そこには、会社法、金融証券取引法、税法、そして証券取引所のルールなどが含まれます。こうした法規制で求められる会計と会計独自の枠組みの関係について考察する整合性研究が重要なテーマとなります⁴。第二は、データを用いた実証的な研究アプローチです。会計上の課題について、財務データを統計的に分析することを通じて解明するものです。第三は分析的研究アプローチです。これは、会計をめぐる事象を数理モデル分析の手法を用いて解明するアプローチとなります。

東北大学会計大学院では、財務会計研究について、主に第二のアプローチを採用する研究者が集まっております。

3 東北大学大学院経済学研究科（会計大学院）の特徴（財務会計研究）

（財務）会計を研究することができる大学としては、日本において数多くありますが、東北大学は下記のような特徴しています。

(1) 修士課程に相当する学位課程が、専門職学位課程となっている

東北大学における博士前期（修士）課程に相当する学位課程は、会計大学院（専門職学位課程）となっています。このことは、研究者養成機関として長所とも短所ともなります。長所としては、

² アカデミックな英語は、日常会話と異なり、使われる単語や文法について一定のパターンがあります。したがって、読むことは比較的容易です。書くことは大変となりますが、英語の校正サービスは充実しており（全世界、全領域の方が使うものであるため）、こうしたサービスを用いることで、ライティング能力は補うことができます。

³ ここでは財務会計について言及します。東北大学の管理会計研究についても特徴的な研究、教育がなされています。以下の研究の分類は、あくまでも方法論的な視座からのものであり、研究の分類には様々なものがあります。また、ここで取り上げた研究方法以外にも、実験的手法、歴史的アプローチなど様々な分析手法があります。

⁴ 2000年までは、会計基準（原則）は財務省（旧大蔵省）に設置された企業会計審議会の下で設定され、そこに関与する研究者（学者）が関与する割合が多い状況でしたが、2001年に民間の財務会計基準機構が設立され、会計基準の設定は、民間（企業出身者、公認会計士）主導となったことから（研究者も参画しているが、そのウエイトは小さくなっている）、こうした役割についての会計研究の役割は小さくなっています。逆に、こうしたプロセスを客観的に分析することが求められるようになったといえます。

会計についての様々な知識を吸収しつつ、研究を進めることができる点にあります（例えば、財務会計領域の研究では、会社法、税法の知識についても必要となりますが、そうした教育スタッフが身近にいる環境は、会計大学院ならではの点⁵）。他方で、修得しなければならない単位数がやや多い点⁵、そして研究と直接的に関連しない科目の履修が必要となるが短所となります。

ただし、東北大学会計大学院では、会計リサーチコースを設け、研究大学院的な指導ができる体制を整えているので、この問題はさほど大きくはありません。また、経済経営学専攻の科目を履修し、修了要件に含めることもできますので、統計学、計量経済学、経済学（ミクロ、マクロ）、経営学について、より高いレベルの講義を受講することが可能です⁶。

(2) 研究リソースの充実

東北大学会計大学院は、データベース、ジャーナル等の研究に必要なリソースについて、充実しております。

(3) 実証的会計研究の研究者が多い

東北大学会計大学院の教員スタッフ（財務会計領域）の特徴としては、実証的会計の研究者が多いことがあります。近年では実証的なアプローチを用いた研究については、細分化が進んでいますが、十分に対応できると考えます。

このことから、博士後期課程までの進学を考えられる方は、実証的な会計研究を中心に進められることを想定していただければと思います。

4 博士後期課程への進学、博士学位取得・就職までのプロセス

会計研究者を目指す方は、会計リサーチコースに所属頂くことになります。そして、会計大学院から博士後期課程への進学は⁷、修了とリサーチペーパー（修士論文に相当）が高水準であることが要件となります（したがって、修了はできるが、進学できない可能性もあります）。

博士後期課程は基本的に3年間の在籍となります。この間、研究を進め、3~5篇の論文を公表し、積極的に研究会や学会報告をしていくことを求めます。3年間で博士学位が取得できるよう、他の教員と連動しつつ指導を進めていきます。

博士後期課程修了後については、基本的には大学への就職が中心となります。近年、いわゆるポストドクター問題（博士学位を取得後も、アカデミックポストに就職できない）が深刻化しておりますが、会計領域は他分野よりも教育に係る需要が大きいことから、この問題は比較的小さい状況にあります。

⁵ 本学の修了要件単位は44単位となっております。1年半で単位を取り終えて、最後の1セメスターでペーパーをまとめることができるケースがほとんどです。一般的な博士前期課程では30単位程度であるケース多いので、若干多いといえます。

⁶ 会計大学院でもこれらの授業が開講されておりますが、経済経営学専攻においてより専門的に学ぶことは重要でしょう。

⁷ 東北大学大学院経済学研究科博士後期課程への進学を想定しております。他大学の博士後期課程への編入も、制度上は可能ですが、受け入れを認めるか否かは教員によります。

5 大学院入学までに準備いただきたいこと

① テーマの設定

皆さんが研究したいテーマの設定です。先に書いたとおり、学部生レベルで考える研究テーマを大学院に入ってそのまま進められることは稀ですが、しかし、自ら研究したいとテーマを考えることは重要です。私自身は、テーマの妥当性よりも、テーマを設定する「能力」を重視します。

それでは、どのようにして研究テーマを見出していくのかですが、新聞等を通じて会計における問題点を把握し、さらには、どういった研究があるのかについて、様々な雑誌を眺めていくことが有用です⁸。

② 基礎的な学力の構築

大学院入学までにどの程度の基礎学力を構築しておけばよいのかについては、様々な見解があるところですが（基本的には学部での内容について理解を頂きたいということになります），修士課程のプロセスは2年間と短いことから、入学前の準備は重要です。具体的には、下記のような事項を想定しています。

会計学の基礎：基本的な計算構造と理論の理解（会計大学院の入学試験を念頭に勉強頂ければ最低限のラインはクリアできるでしょう）

関連領域の基礎知識：コーポレートファイナンス（企業財務・経営財務），ミクロ経済学，統計学，計量経済学については経済（経営・商）学部における上級科目（3から4年次配当科目）レベルの知識の理解。ただし、これらの知識は大学院に入ってからでもフォローできます。

③ 継続的に（英語の）語学力を高める工夫

前述のとおりです。短期的には読む能力が求められますが、話す能力・書く能力も（近い）将来において必要となります。語学力の向上は長期戦です。ネットでの英会話など継続的な努力を進めていただければと思います。

⁸ 雑誌（ジャーナル）について、とりあえずは、企業会計（中央経済社），会計（森山書店），産業経理（産業経理協会）あたりの総合的な会計関連の雑誌に目を通されるとよいでしょう。また、近年では、各大学で提出された博士論文のテーマについては、国立国会図書館で検索（CiNii Dissertations: <http://ci.nii.ac.jp/d/>）が可能となっています。文献については、ご相談ください。

木村を指導教員として希望される方へ

木村を指導教員として希望される方は、これまでの文書をふまえ、以下の点をご確認ください⁹。
まず、以下のいずれに該当するのかについて、確認してください

基本方針

- ・研究指導は**日本語**となります
- ・論文の執筆は**日本語または英語**となります

入学の前提となる知識

- ・学部レベルの財務会計
- ・学部レベルの統計学・計量経済学の知識
- ・英語文献を読める能力

A 博士後期課程（ドクターコース）への進学を志望する方

会計リサーチコースに入学し、リサーチペーパーを提出、そして、そのリサーチペーパーが高い水準で合格することが、後期課程進学条件となります。

また、後期課程での指導を視野に入れた場合、指導可能なテーマは、以下の通りとなります

- ・earnings management（利益マネジメント・利益調整）に関する実証研究
- ・earnings management に関する国際比較研究（実証研究）
- ・コーポレートガバナンスと会計情報（実証研究）
- ・会計情報の価値関連性研究（実証研究）

実験研究、数理的なモデルと適用した研究、規範的な研究については対応できません。
後期課程での研究テーマについては、入学後に相談しながら決定していきます。

B 会計大学院会計リサーチコースを志望で、博士後期課程への進学を希望しない（修了後、就職等を志望している）方

Aでの研究テーマよりは広いテーマでのペーパーに対する指導が可能です。財務会計、財務諸表分析に関連するテーマでしたら指導いたします。

* 公認会計士コース、ビジネスアカウンティングコースでは研究指導はございません。

⁹ 木村のプロフィール、業績等は、<http://www.econ.tohoku.ac.jp/~fkimura/> をご参照ください。一部論文へのリンクもはっております。